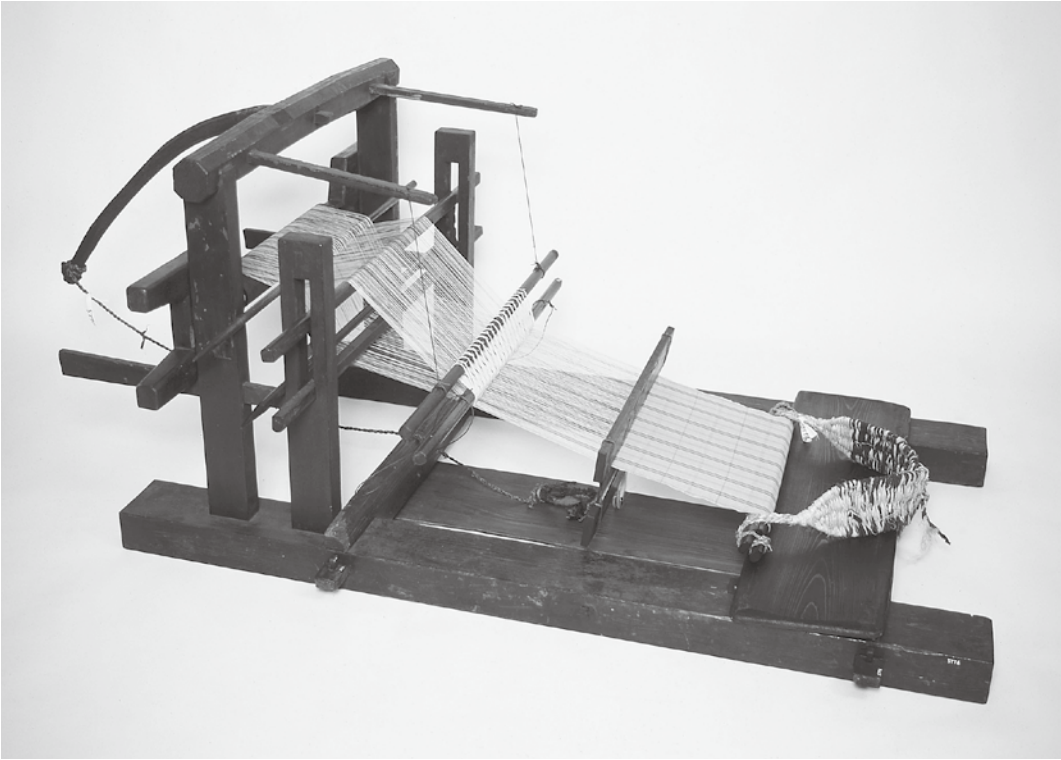
十日町市博物館 年報

— 第 2 号 —



平成 27 年度

刊行にあたって

当館は昭和54年（1979）の開館以来、「妻有地方の自然と文化」をテーマに掲げ、「雪」と「織物」と「信濃川」を柱に、博物館友の会と車の車輪のごとく協力して活動を続けてきました。その中で、重要文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料2,098点」（昭和61年指定）、同「十日町の積雪期用具3,868点」（平成３年指定）、すばらしい造形美を誇る火焔型土器を含む国宝「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器57点（附871点）」（平成11年指定）を生み出しています。また、展示もこれまでに増築およびリニューアルを行い、三つの常設展示室をもつにいたりました。

現在、当館では平成32年（2020）春のオープンを目指して新博物館建設事業を進めており、平成26年度は基本構想、そして、平成27年度は基本計画を策定しています。本書をご高覧いただき、ご指導とご鞭撻いただければ幸いです。

十 日 町 市 博 物 館

目　　次

Ⅰ　館の運営 …… 1
　１．来館者の状況 …… 1
　２．博物館協議会 …… 2
　３．予　算 …… 3
Ⅱ　事業の概要 …… 4
　１．教育普及・展示事業 …… 4
　２．博物館リニューアル事業 …… 8
　３．縄文文化発信事業 …… 11
　４．資料の収集・貸出 …… 12
　５．その他の事業 …… 13
Ⅲ　調査・報告 …… 14
　・特別寄稿「美術から見た縄文土器 ―火焔型土器の登場―」鈴木 希帆（東京国立博物館）…… 14
　・報　　告「博物館所蔵写真資料の各種印刷物における利用状況」菅 沼　亘（学芸員）…… 17
Ⅳ　博物館友の会 …… 19
附編　入館者数の推移 …… 20

例　　言

１．本書は、十日町市博物館の平成27年度・事業報告である。

２．特別寄稿として、鈴木 希帆氏より玉稿を賜った。

３．本書に掲載されている写真の無断掲載（転載）を禁じる。すべての著作権は十日町市博物館と撮影者・提供者に帰属する。

４．本書の編集は菅沼　亘（学芸員）が行った。原稿の執筆は職員で分担し、文末に氏名を明示した。

５．本年度の事業を行うにあたり、関係諸機関および多くの皆様から多大なるご協力をいただいた。個々に名前を記すことはできないが、お礼申し上げる。

（表紙写真：重文・越後縮の地機）

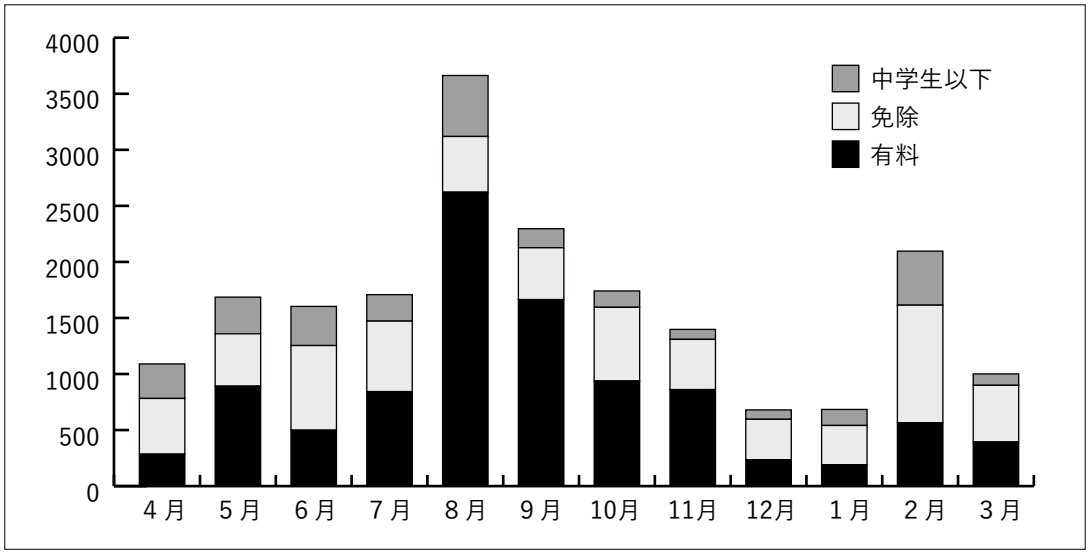
Ⅰ　館の運営

１．来館者の状況

①月別の推移

来館者数の月別推移は、以下のとおりである。中学生以下は無料、高校生以上が有料となっている。

区　分		４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合 計
一般	有　料	285	892	499	843	2,622	1,664	938	861	235	191	566	394	9,990
	免　除	497	467	755	629	497	462	657	448	361	350	1,048	505	6,676
中学生以下		308	327	349	236	544	170	146	89	84	143	482	102	2,980
合　計		1,090	1,686	1,603	1,708	3,663	2,296	1,741	1,398	680	684	2,096	1,001	19,646



月別来館者数一覧

②団体と視察の受入れ状況

入館料減免申請書や博物館視察・見学・研修依頼書、電話により受け入れた団体について、小学校26校、中学校２校、その他の45団体に分けて以下に示す。　　（引間 佳子）

	小　学　校　名
1	十日町市立川治小（６年）
2	十日町市立十日町小（３・６年）
3	南魚沼市立五日町小（６年）
4	十日町市立千手小（３・６年・歴史クラブ）
5	十日町市立上野小（３・６年・歴史クラブ）
6	南魚沼市立第一上田小（６年）
7	十日町市立橘小（６年）
8	南魚沼市立北辰小（６年）
9	上越市立大島小（５・６年）
10	魚沼市立堀之内小（６年）
11	南魚沼市立三用小（６年）
12	魚沼市立広神西小（６年）
13	十日町市立飛渡第一小（５・６年）

	小　学　校　名
14	南魚沼市立後山小（６年）
15	十日町市立鐙島小（３・６年）
16	十日町市立中条小（３・６年）
17	南魚沼市立中之島小（６年）
18	十日町市立倉俣小（３・４年）
19	十日町市立吉田小（3年）
20	十日町市立西小（２・３・４・６年）
21	埼玉県東鷲宮小（６年）
22	津南町立芦ヶ崎小（６年）
23	十日町市立田沢小（３年）
24	十日町市立東小（３・４年）
25	十日町市立水沢小（３年）
26	小千谷市立南小（３年）

	中　学　校　名
1	十日町市立中条中（１年）
2	十日町市立川西中（１年）

小・中学校一覧

	団　体　名		団　体　名		団　体　名
1	立正佼成会やわらぎツアー	16	クロアチア関係者視察	31	新潟スカイツーリスト
2	NPO国際縄文学協会	17	南魚沼市寺尾槇ノ木会	32	きもの女王勉強会
3	茅野市ロータリークラブ	18	長岡市まなびざ・せきはら	33	山形県舟形町議会
4	北陸地区女子神職研修会	19	郡市教頭会	34	久米島町長視察
5	平井小松川地域連合会	20	絵手紙サークル一歩の会	35	島根県邑南町議会
6	宝達志水町議会	21	茅ヶ岳歴史文化研究所	36	山の歩の会
7	清瀬市郷土資料館友の会	22	観光コンシェルジュ	37	たんす屋　長野店
8	駐日メキシコ大使一行	23	ニューグリーンピア津南	38	南国市議会
9	コモ市使節団	24	沖縄県北谷町議会	39	和光市教育委員会
10	小樽ライオンズクラブ	25	熊谷市郷土文化会	40	国際情報大学
11	柏崎市田尻コミュニティ	26	第五寿クラブ	41	加須市
12	愛知県豊川市議会	27	手織教室はたおと	42	アサヒ旅行
13	松代チャレンジ通学合宿	28	信州自由塾	43	NHKカルチャー
14	魚沼ブロック行政相談員	29	南魚沼市・十日町市社会教育委員	44	上越市身体障がい者福祉協会
15	北海道CBツアー	30	長岡市議会	45	中条公民館山手交流

その他の団体一覧

２．博物館協議会

協議会は年に２回開催され、各回の詳細は以下のとおりである。委員は計10名で、平成25年度よりその一部を公募している。

・第１回　10月21日(水)　13：30～15：00　委員10名出席

報告：十日町市博物館の概要について

平成27年度上半期博物館事業状況について

協議：新博物館建設について

・第２回　平成28年3月22日(火)　13：30～15：30　委員９名出席

報告：平成27年度下半期博物館事業状況について

平成28年度博物館事業計画について

協議：新博物館基本計画（案）について　（南雲 勝巳）

氏　名	職業・所属団体（役職など）	備　考
星　名　信　昭	十日町市博物館友の会 会長	委員長、社会教育
市　村　正　史	十日町市文化協会連合会 副会長	副委員長、社会教育
小　林　圭　介	十日町市立西小学校 校長	学校教育
長谷川　吉　徳	十日町青年会議所 副理事長	社会教育
高　橋　政　子	十日町市教育センター 嘱託指導主事	学校教育
阿　部　純　子	十日町市立東小学校ＰＴＡ 副会長	家庭教育
徳　永　由　起	十日町市立川治小学校ＰＴＡ 副会長	家庭教育
根　津　雅　子	会社役員・いけばな教師	公募
佐　藤　幸　子		公募
阿　部　由美子		公募

博物館協議会委員一覧（任期：平成27年4月1日～平成29年3月31日）

３．予　算

平成27年度の予算は以下のとおりである。一般経費と施設維持管理費を除いた博物館事業費の歳出総額（補正後）に占める割合は約50％となっている　（矢口 ヨネ子）

歳入予算　（単位：千円）

款　　項　　目				
節	説　明	当初予算額	補正額	補正後予算額
13款　使用料及び手数料	１項　使用料　　７目　教育使用料			
５．博物館入館料	５．博物館入館料	1,900	0	1,900
13款　使用料及び手数料	１項　使用料　　７目　教育使用料			
５．博物館入館料	10．施設使用者使用料	33	0	33
20款　諸収入	５項　雑入　　２目　雑入			
８．教育雑入	１．私用電話料	1	0	1
20款　諸収入	５項　雑入　　２目　雑入			
８．教育雑入	２．私用コピー使用料	1	0	1
20款　諸収入	５項　雑入　　２目　雑入			
８．教育雑入	３．施設使用者電気料	24	0	24
20款　諸収入	５項　雑入　　２目　雑入			
８．教育雑入	70．古文書講座資料代	40	0	40
20款　諸収入	５項　雑入　　２目　雑入			
８．教育雑入	98．その他雑入	1	0	1

歳出予算　（単位：千円、千円未満切り上げ）

節		当初予算額	補正額	補正後予算額
１．報　酬	博物館協議会委員	110	0	110
７．賃　金	臨時職員賃金	959	0	959
８．報償費	講師謝礼・指導者謝礼ほか	2,791	△242	2,549
９．旅　費	費用弁償・普通旅費	462	242	704
11．需要費	消耗品費・燃料費・食糧費・印刷製本費・光熱水費・修繕料	11,836	1,571	13,407
12．役務費	通信運搬費・手数料・保険料	2,639	△28	2,611
13．委託料	新博物館基本計画策定・DVD作成・館維持管理・収蔵物移転整理	14,860	△1,681	13,179
14．使用料ほか	テレビ受信料・コピー機リース・収蔵品管理システム利用・自動車レンタル	954	0	954
15．工事請負費	文化財看板等設置工事・遺跡ひろば外灯修繕工事	0	2,184	2,184
19．負担金ほか	日本博物館協会ほか負担金	46	50	96
	計	34,657	2,096	36,753

事業別歳出予算内訳　（単位：千円、千円未満切り上げ）

事　　業　　名	当初予算額	補正額	補正後予算額
一般経費	1,026	19	1,045
博物館施設維持管理（除排雪経費含む）	14,963	2,547	17,510
国宝発信事業	514	0	514
博物館リニューアル事業	10,290	△ 1,107	9,183
教育普及・展示事業	2,677	0	2,677
資料収集・調査研究・資料保存対策事業	695	320	1,015
縄文文化発信事業	4,492	317	4,809
計	34,657	2,096	36,753

Ⅱ　事業の概要

１．教育普及・展示事業

①教育普及事業

博物館講座

本講座は市民を対象としたもので６月に行われ、平成24年度からは郷土の遺産をテーマとしている。平成24年度は越後縮、平成25年度は自然、平成26年度は石仏、今年度は火焔型土器がテーマである。各回の演題と講師は以下のとおりであり、全３回で計78人の受講者があった(受講料無料)。なお、第３回目講師の鈴木希帆氏より講演要旨を寄稿していただいた（14頁)。

第１回：６月13日(土)「科学の目で見る火炎土器」
　　宮内 信雄 氏（当館 嘱託調査研究員）
第２回：６月20日(土)「火焔型土器の作り方」
　　宮 尾　亨 氏（新潟県立歴史博物館 専門研究員）
第３回：６月27日(土)「美術から見た縄文土器
　　―火焔型土器の登場―」
　　鈴木 希帆 氏（東京国立博物館 アソシエイトフェロー）

博物館講座の様子（第２回）

古文書入門講座

本講座は古文書解読の初心者を対象としたもので、市内の史料をテキストにして古文書に親しむと共に、郷土の歴史を学ぶことを目的としている。昨年度に続き、講師は林　悦郎氏（博物館友の会・古文書研究グループ）にお願いした。今年度は五人組帳、行事帳、賀例帳、凶年諸雑記、酒造方諸記などをテキストとした。講座は６～３月の土曜日（隔週・午前）に行われ、回数は全17回である。今年度の受講生は計17人、内４人が新規の申し込み、その他は昨年度からの継続であった。また、受講生よりテキスト代（2,500円）を徴収している。

子ども博物館

本事業は、市内の小学４～６年生を対象とした体験教室である。今年度は以下のとおり、縄文体験を全３回行った。各回とも定員15名(事前申込)、参加費(材料費)を徴収し、保護者(参加費不要)も参加可能としている。土器と土偶・土版づくりではオーブン陶土を使用した。また、縄文スノードームづくりでは、市販のキットと土偶フィギュアを利用している。

①８月１日(土)　土器づくり（参加者：14人）
②10月10日(土)　土偶・土版づくり（参加者：10人）
③12月13日(土)　縄文スノードームづくり（参加者：24人）

土器づくり

土偶・土版づくり

縄文スノードームづくり

博学連携

本事業は、平成14年に発足した信濃川火焔街道連携協議会（新潟市・三条市・長岡市・十日町市・津南町）が行う事業の一つ、火焔街道博学連携プロジェクトに伴うものである。このプロジェクトは、縄文を総合学習のテーマとする小学校が集まり、そこに地域の学芸員が協力して体験や研究活動を行い、交流学習会、フォーラム、展覧会へと展開する事業で、平成15年度より開始された。今年度は、長岡市立関原小学校(110名)、小千谷市立吉谷小学校(18名)、十日町市では下条小学校(30名)、中条小学校(28名)、鐙島小学校(10名)の６年生が参加している。

交流学習会の様子

この内の交流学習会が、６月29日(月)に当館と総合体育館において開催された。学習会では縄文展示の見学、ミニチュア土器づくり体験、仲間づくりゲーム、縄文クイズ大会などが行われ、生徒たちが交流を深めている。また、７月７日(火)には、鐙島小学校６年生10人が土器づくり（樹脂粘土使用）を体験している。

②展示事業

夏季企画展「カストリ雑誌とその時代　―西潟浩平氏コレクション展―」

本展は、終戦70周年記念として博物館友の会との共催で開催された。会期は、７月25日(土)～８月30日(日)の37日間、観覧者数は計4,230人である。本展では、市内在住の西潟浩平氏が所蔵する1,000冊を超える終戦前後の雑誌類と当館所蔵資料を展示し、戦後の復興に向けた人々の活気と、教科書や歴史書に書かれた事実とは一味違うもう一つの戦後を来館者に垣間見せることを目的とした。カストリ雑誌は、終戦直後の1946～50年代に盛んに出版された大衆娯楽雑誌である。これらの多くは、刺激の強い性風俗を取り上げたものであるが、小説、実話、政界の暴露話、犯罪研究など内容は様々なジャンルにおよぶ。

企画展のチラシ・ポスター

展示構成は、①カストリ雑誌とは、②カストリ雑誌・あれこれ、③カストリ雑誌と同時代の雑誌、④十日町市の戦中と戦後である。①では、カストリ雑誌の創刊号を紹介している。②は、表紙絵と画家（岩田専太郎・志村立美・東郷青児)、小説・詩、漫画・風刺画、記事・宣伝広告に注目した展示である。③では、アサヒグラフや毎日グラフなど写真を主体に編集された雑誌（画報）を展示して、当時の生活や文化を紹介した。④は、市民から寄贈された戦中から戦後の資料と山内景行家写真資料（寄託）を展示している。なお、７月26日・８月９・23日(日)の３日間は市民に限り観覧無料とし、同日午後には西潟浩平氏によるギャラリートークが開催され、計42人が集まった。会期中には、パンフレット（Ａ３・二つ折り）を無料配布している。

企画展会場（①～③）

企画展会場（④）

ギャラリートークの様子

秋季特別展「縄文後期の墓 栗ノ木田遺跡　―縄文人の死と弔い―」

本展は、博物館友の会と信濃川火焔街道連携協議会との共催で開催された。会期は10月３日(土)～11月8日(日)の37日間、観覧者数は計2,162人である。10月10日(土)～12日(月･体育の日)の3日間については、市民に限り観覧無料とした。

特別展のチラシ・ポスター

栗ノ木田遺跡は、1986年(昭和61)に市教育委員会によって調査された縄文時代後期前半の集団墓地跡である。調査では、堀之内式～加曽利Ｂ式期の立石配石遺構２基、配石墓35基などが発見されている。また、これらの下に掘られた土壙(墓穴)からは、倒立した状態で土器が出土しており、土器被覆葬の良好な事例である。これは死者の頭部(顔)に土器を被せるという埋葬方法で、縄文時代後期前半に関東・中部地方を中心に見られる。その意味については、悪霊を封じ込めるためと考えられている。本展では、本遺跡資料と合わせて新潟、群馬、長野、山梨県内における同時期の出土品を展示し、縄文人の葬送儀礼について紹介した。

展示構成は、①栗ノ木田遺跡と市内の後期遺跡、②死者に土器を被せる、③死者に供えられたモノ、④配石遺構と儀礼である。①は栗ノ木田遺跡、野首遺跡、樽沢開田遺跡など後期遺跡の主な出土品、②では群馬・長野県内を中心に、土器被覆葬に使用された土器をその出土状況写真と合わせて一堂に展示した。また、関連資料として中・近世墓の鍋被り葬を紹介した。③は、墓に副葬された土器、垂飾などの装身具、土偶、石棒などを展示している。④では山梨県北杜市金生遺跡の配石遺構に伴って出土した土偶、大形石棒、土製耳飾などを中心に展示した。また、10月24日(土)午後には、中村耕作氏（國學院大學栃木短期大学専任講師）を招いて、記念講演会「死者に供えられた土器」を開催し、33人の聴講者が参集した。なお、パンフレット（Ａ３・二つ折り）を無料配布、記念講演会の要旨を収録した図録をミュージアムショップで有料頒布している。

特別展会場（①・③・④）

特別展会場（②・③・④）

記念講演会の様子

巡回展「子ども縄文研究展 2015　―縄文のメッセージ・私のメッセージ―」

本展は上述の博学連携プロジェクトに伴うもので、主催は火焔街道博学連携プロジェクト、共催は新潟県立歴史博物館、十日町市博物館、津南町農と縄文の体験実習館なじょもん、後援が信濃川火焔街道連携協議会である。会期は平成28年１月16日(土)～２月21日(日)の37日間、観覧者数は2,038人であった(観覧無料)。本展では、プロジェクトに参加した各小学校の６年生が１年間をかけて学習したテーマについて、パネル、模型などを使用して解説し、体験学習で製作した土器、勾玉なども展示されている。

巡回展会場

ロビー特設展示

本展示はロビー壁面ガラスケースの有効活用とリピータの増加を図り、館蔵資料などを定期的に入れ替えて展示するものである。今年度は以下のとおり、５回実施した。

・４月21日(火)～６月28日(日)　新十日町市指定文化財「中島遺跡出土品」(縄文時代後期)
・７月26日(日)～９月27日(日)　大地の芸術祭「大地を包む」(眞田岳彦アートプロジェクト)
・10月３日(土)～11月８日(日)　「十日町市の火焔型土器」
・11月21日(土)～１月11日(月)　「山内景行家（山内写真館）写真資料」(寄託)
・１月16日(土)～３月27日(日)　「昭和のくらし　―博物館に寄贈された昔の道具―」

中島遺跡出土品

大地を包む

昭和のくらし

貸　　館

十日町市書道協会が、特別展示室を使用して書道協会展を開催している。会期は６月５日(金)～７日(日)の３日間、観覧者数は149人（観覧無料）であった。なお、同展の後援が十日町市教育委員会であったため、会場使用料を免除している。

③そ　の　他

博物館実習

７月30日(木)～８月５日(水)まで実習生を受け入れた。受入れ大学と人数は、新潟大学人文学部１人である。実習では民俗・考古資料の整理、教育普及活動の補助、受付業務、市内博物館関連施設の見学などを行っている。

職場体験

８月上旬に中学１・２年生の職場体験を受け入れた。受入れ中学校・人数と期間は、中条中学校１年生２人（８月３日)、同２年生２人（８月３～５日）の計４人である。体験では考古資料の整理、受付業務、市内博物館施設の見学などを行った。

学芸員の派遣

学芸員の講演会などへの派遣は以下のとおりである。　(菅沼　亘)

講　師	演　　題	講座名・主催者など	会　　場	日　時
笠井 洋祐	十日町市貝野沢田遺跡の調査成果	新潟県考古学会　第27回大会研究発表会	新潟市万代市民会館	６月７日(日)
菅 沼　亘	縄文時代中期の華　火焔型土器	平成27年度　茅野市尖石縄文考古館　縄文ゼミナール④	茅野市尖石縄文考古館	８月22日(土)
菅 沼　亘	火焔型土器の造形	縄文王国　山梨シンポジウム　世界に誇る「縄文の美」を語る	岡島ローヤル会館(甲府市)	10月17日(土)
菅 沼　亘	十日町市の火焔型土器群	和光市市制施行45周年記念特別展「出土遺物の交流と結」記念講演会	和光市民文化センター	11月29日(日)
笠井 洋祐	新潟県十日町市貝野沢田遺跡の発掘調査成果について	第29回東北日本の旧石器文化を語る会　新潟大会	アオーレ長岡	12月19日(土)

学芸員の派遣一覧

２．博物館リニューアル事業

①新博物館基本計画策定業務委託

平成26年度に作成した新博物館の基本方針などをまとめた「新十日町市博物館基本構想」を具体化する計画を策定するため、施設・展示計画の検討や各種資料、新十日町市博物館基本計画書の作成などの基本計画策定に関する業務をコンサルタント業者に委託した。

コンサルタント業者の選定は、プロポーザル方式により公募したところ、２社から応募があり、平成27年10月５日(月)に委員６名による審査委員会において、提案企画、業務実績、業務推進体制及び見積価格などについて審査した結果､評価点の最も高い（株)トータルメディア開発研究所が選定され、契約を締結した。

・契約金額：6,912,000円

・契約期間：平成27年10月13日～平成28年３月31日　　（南雲 勝巳）

②新博物館基本計画検討委員会

新博物館の基本計画を策定するにあたり、様々な分野の専門家から広く意見を伺うため、「新十日町市博物館基本計画検討委員会」を計５回開催した。委員の構成および委員会の経過は以下のとおりである。また、館報の第１号に収録した新十日町市博物館基本構想（案）が、委員会での検討（修正）を経て正案となったため、その抜粋を改めて示す。

・委員の構成（任　期：平成27年５月１日～平成28年３月31日）

委 員 長　　青 木　豊（國學院大學文学部 教授）

副委員長　　池田 哲夫（新潟大学人文学部 教授）

山本 哲也（新潟県立歴史博物館 専門研究員）

新田 太郎（東京都江戸東京博物館 事業企画課長）

星名 信昭（十日町市博物館友の会 会長）

池田 史子（giftクリエイティブ・ディレクター・山ノ家 主宰）

・委員会の経過

第１回：平成27年７月１日(水)　　基本構想（案）の検討

第２回：平成27年10月15日(木)　　新博物館建設候補地・縄文時代の常設展示について検討

以下、基本計画策定業務委託業者も同席

第３回：平成27年11月28日(土)　　諸室と設備および配置・織物の常設展示について検討

第４回：平成28年１月29日(金)　　雪・信濃川と地域文化の常設展示・建物の外観について検討

第５回：平成28年３月14日(月)　　基本計画書（案）の検討

委員会の冒頭のみマスコミ取材を受付

・会　場　　第１・３・５回：十日町市博物館（会議室・集会室）

第２・４回：十日町情報館（第１集会室）

第１回検討委員会

第３回検討委員会

第５回検討委員会

「新十日町市博物館基本構想」（抜粋）

新博物館の基本理念　「市民・来館者とともに考え、活動し、成長する博物館」

新博物館のビジョン　新しい十日町市博物館は、十日町の多様で豊かな自然と歴史･文化について、市民・来館者の皆さんと共に探究し、保全・継承し、その価値を国内外に発信します。このことにより、十日町の特徴と素晴らしさに気づき、地域をより良くしようとする人々が集い、誇りと活気に満ちた社会づくりを目指します。

新博物館の使命　新しい博物館は、かけがえのない地域の財産である「国宝・笹山遺跡火焔型土器群をはじめとした縄文文化」と「古代にまで歴史がさかのぼる織物文化」、これらを生み出す原動力となった「雪と信濃川の恵みと文化」を守り継承して、その魅力を国内外に情報発信する施設です。そして、以下の使命を掲げて活動します。

(1) 市民の知的関心に応えるため、資料や情報を収集・保存、調査・研究、展示・普及し、生涯学習の拠点としてその役割を果たします。

(2) 地域の歴史や文化に対する市民の理解を深め、より良い未来に向かって市民と共に新しい価値を創造します。

(3) 魅力ある財産として地域固有の歴史・生活文化・産業に光をあて、その活用を通した来館者との交流により地域振興に貢献します。

(4) 市民および来館者と対話しながら共に成長し、また、博物館友の会、他の博物館・関係機関と連携して活動します。

新博物館の使命を実現するための基本方針

使命を実現するために以下の取り組みを行います。

(1) 展　　示

・常設展示は、「国宝・火焔型土器のふるさと―雪と織物と信濃川―」をテーマに、「縄文時代と火焔型土器のクニ」、「織物の歴史」、「雪・信濃川と地域文化」の３つで構成します。

・展示は実物資料を中心とし、映像・音声・模型・参加体験型展示などの手法も取り入れ、誰もが親しめるわかりやすい展示を行います。

・実物資料の展示にあたっては、その保存と管理に十分配慮します。

(2) 教 育 普 及

・講座や講演会、体験活動、調査研究に基づいた企画展や特別展を開催し、市民と共に知的楽しみを分かち合います。

・学校教育を積極的に支援し、地域に対する子どもたちの理解を深めます。

・市民による展示解説案内等ボランティアの育成を行い、来館者と市民との交流を通して市民の生きがい作りを促進します。

(3) 資料収集・保管

・体系的に地域資料を収集、整理、保管し、市民共有の財産として次世代に継承します。

(4) 調 査 研 究

・調査研究を継続的に行い、新たな事実や価値を発見して博物館活動に反映します。

・博物館友の会研究グループや古文書整理ボランティア等の調査成果を展示活動に活かします。

(5) 情報発信・公開

・誰もが調べることができる学習拠点として情報を発信します。

・収集した地域資料や図書、調査研究成果等をデータベース化し、国内外に広く公開します。

(6) 施設の管理・運営

・安心と安全を第一に危機管理を行い、また、誰にもやさしい博物館として施設を運営します。

③新博物館基本計画の概要

「新十日町市博物館基本計画書」は本文25頁からなり、目次構成を以下に示す。また、パブリックコメントを行い、その全文をホームページで公開予定である。詳細はそちらを参照願いたい。

第１章　「基本的な考え方」

⑴計画の背景

十日町市の歴史／地域文化の創造拠点として／国内外へ十日町市の魅力を発信する施設を

⑵新博物館のめざす姿

新博物館の基本理念／新博物館のビジョン／新博物館の使命／新博物館の目標

⑶新博物館の基本方針

新博物館の機能／現博物館の機能

⑷施設活動の基本的な考え方

活動計画／展示計画／施設計画

第２章　「活動計画」

⑴施設活動計画の概要

交流活動／基本活動

⑵活動計画

情報提供活動／企画・広報活動／学習・研究支援活動／展示活動／資料収集・保存活動／研究活動

第３章　「展示計画」

⑴展示計画の考え方

全体テーマ／展示構成／全体の展示構成／導入展示「十日町市と地域の文化」

⑵展示計画の展開方針

常設展示Ⅰ「縄文時代と火焔型土器のクニ」／常設展示Ⅱ「織物の歴史」／常設展示Ⅲ「雪と信濃川」

⑶展示と連携する施設計画／活動計画

第４章　「施設計画」

⑴施設計画の方針

博物館の活動を支える施設整備／周辺との一体的な整備とランドマーク性／利用者の視点に立った施設整備／維持管理にかかるコスト低減への配慮／環境保全への配慮／観光との連携

⑵想定される規模

⑶立地環境

建設予定地／周辺施設

⑷建築計画

配置計画・アプローチの考え方／平面計画／立面・内装計画／断面計画／構造計画／設備計画／土地利用計画図

⑸現況写真

⑹施設諸機能

展示機能／交流機能／管理運営・調査研究機能／収集・保存機能／共用・サービス機能

⑺施設機能／構成概念図

⑻建築面積、延べ床面積、面積表

第５章　「博物館建設に向けて」

⑴建設事業スケジュール

⑵建設費用の概算

第６章　「設計に向けて」

（菅沼　亘）

３．縄文文化発信事業

平成25年度から「2020年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に火焔型土器を」ということで、下村前文部科学大臣および青柳文化庁長官などに要望をしていたが、今年度からはオリンピックの聖火台だけではなく、オリンピック開会式のテーマの中に縄文文化を取り入れて、さらに縄文時代の考え方を今の社会に提起し、「なぜ今縄文なのか？」をキーワードとして多くの人に縄文文化を知ってもらうため、本事業に取り組んできた。

①縄文国宝サミット（仮称）の提案

全国で縄文時代の国宝が出土している自治体は、北海道函館市、青森県八戸市、山形県舟形町、長野県茅野市と十日町市の５つの自治体のみである。この国宝を活用し連携することで、新たなまちづくり、観光や産業について発信できないか各自治体に出向いて説明を行った。

②国宝・火焔型土器の大型写真看板作製

縄文時代の土器や土偶の撮影で知られる写真家「滋澤雅人」氏に依頼して、クロステン十日町の正面壁面に国宝・火焔型土器(№１)の巨大写真看板(高さ７ｍ・幅５ｍ)を作製し、「火焔型土器のクニ」をアピールした。現在はライトアップされ､夜間でもほくほく線の電車内から見ることが可能である。

③縄文土器先生ＤＶＤ制作

ＮＨＫ教育テレビ「びじゅチューン」という世界中の美術作品をわかりやすく解説する番組に、当館所蔵の国宝・火焔型土器をモチーフにした「縄文土器先生」というキャラクターが登場した。今年の大地の芸術祭期間には、「縄文土器先生に会いに来ました」という来館者もあり話題となっている。ＮＨＫエデュケーショナルとの間で著作権処理を行い、当館バージョンのＤＶＤ200枚を作製し、市内の教育機関に配布した。10月の市制施行10周年記念式典では、国宝出土地にある中条小学校の児童たちが唄と踊りを披露している。また、平成28年4月に小学館から発売の「びじゅチューンDVD-BOOK2」には、特典映像として「おどってみよう縄文土器先生」が特別に挿入される予定である。

④ＪＲ大宮駅デジタルサイネージ（電子広告板）

ＪＲ大宮駅は、一日の乗車人数が約25万人の全国８位を誇るターミナル駅で、東北・山形・秋田・上越・長野・北陸新幹線の接続駅でもある。この大宮駅構内の自由連絡通路に設置されているデジタルサイネージ（電子広告看板）において、「火焔型土器のクニ　新潟県十日町市」というメッセージと共に、国宝・火焔型土器の画像を十日町商工会議と協力して掲示した。自由通路５本の柱に設置された70インチのモニター計20面に、一回15秒の動画が６分ごとに放映された。10月１～30日の間に約5,100回放映され、全国に十日町市をＰＲしている。　（佐野 誠市）

国宝・火焔型土器の大型写真看板

JR大宮駅のデジタルサイネージ

４．資料の収集・貸出

①資料の寄贈

博物館では、市民から資料の寄贈を受けている。館内および館外収蔵庫の収容量が限られているため、受け入れの可否については、同種の資料が既に一定の点数収蔵されていないか、展示および貸出(使用)に耐えうる保存状況か、おおよその製作・使用年代がわかっているかなどを判断基準としている。今年度は、以下のとおり34件の寄贈を受けた(受付番号14936〜14964・平成28年２月29日現在)。

14936(化粧まわしほか)、14937(タヌキ剥製ほか)、14938(軍隊手帳ほか)、14939(棒秤)、14940(香炉)、14941(漆塗り椀ほか)、14942(庚申供養道具ほか)、14943(天秤ばかりほか)、14944(雪下駄)、14945(従軍記章之證ほか)、14946(古書籍ほか)、14947(昔の洗濯機ほか)、14948(舟箱形シャトルほか)、14949(土地名寄帳ほか)、14950(『越能山都登』復刻版ほか)、14951(コモヅチほか)、14952（ダイヤル式電話機ほか)、14953(昔の着物ほか)、14954(電気コタツほか)、14955(旧中里村関係古文書)、14956(昔の教科書ほか)、14957(掛軸「墨竹図」)、14958(浪曲のレコード)、14959(古文書・巻物)、14960(大賀一郎博士関連資料)、14961(古書籍ほか)、14962(古書籍)、14963(蓄音機ほか)、14964(農家組合関係文書)

昔の洗濯機

庚申供養道具

古書籍

②実物資料の貸出

実物資料の貸出状況は以下のとおり、考古資料９件、着物資料１件、民俗資料（複製含む）３件の計13件である。　　（菅沼　亘）

貸　　出　　先	資　　料　　名（点数）	目　　的（展覧会名など）
浅間縄文ミュージアム	幅上遺跡火焔型土器ほか19点／森上遺跡火焔型土器２点　計21点	春夏季企画展「縄文5000年前の世界」(4/25〜8/31)
長岡市馬高縄文館	横割遺跡深鉢３点・土偶２点　計５点	夏季企画展「北陸の土器と火炎土器Ⅰ―新潟県の様相をさぐる―」(7/18 〜 9/6)
茅野市尖石縄文考古館	野首遺跡火焔型・王冠型土器5点／国宝・笹山遺跡火焔型土器レプリカ(№１)１点　計６点	特別展「縄文土器造形の頂点　5000年後の競演」(8/1〜9/13)
星と森の詩美術館	笹山遺跡火焔型・王冠型土器ほか７点／カウカ平Ａ遺跡火焔型土器１点／宮ノ上Ａ遺跡深鉢１点　計９点	特別展「小さな星をさがして」(8/7〜9/27)
津南町農と縄文の体験実習館なじょもん	伊達八幡館跡銅製仏具ほか22点／笹山遺跡・水沢館跡・南谷内館跡ほか陶磁器類36点　計58点	秋季企画展「魚沼地方の中世」(9/5〜11/8)
山梨県立考古博物館	国宝・笹山遺跡火焔型・王冠型土器３点／野首遺跡火焔型・王冠型土器５点　計８点	秋季特別展「縄文の美―世界に誇るJOMON芸術―」(10/6〜11/23)
九州国立博物館	国宝・笹山遺跡火焔型土器(№６)１点	開館10周年記念特別展「美の国　日本」(10/18〜11/29)
和光市教育委員会	野首遺跡火焔型土器ほか３点／笹山遺跡火焔型・王冠型土器２点／梶花遺跡ヒスイ加工品１点　計６点	市制施行45周年記念特別展「出土遺物の交流と結」(11/19〜12/6)
株式会社 新潟テレビ21	国宝・笹山遺跡火焔型土器レプリカ(№１)１点	テレビ番組撮影
十日町きものまつり実行委員会	明石ちぢみ・マジョリカお召・紬絣・越後縮紋付ほか計15点	十日町きものまつり「きもの文化体験ひろば」(5/2〜5/3)
NHK報道局社会番組部	テカコ゜1点	テレビ番組（NHKスペシャル）撮影
四季の風	ワラグツ・スッポン・スゲボシほか８点（複製）	ひの社会教育センター秋まつりバザー
雪まつり実行委員会	スゲボシ５点（複製）	十日町雪まつりウェルカムセレモニー

実物資料の貸出一覧

③写真資料の貸出

写真資料の貸出件数は計141件、主な貸出状況は以下のとおりである。例年どおり、国宝・笹山遺跡火焔型土器をはじめとする考古資料が９割以上を占めている。その他には、越後アンギン、館内ジオラマ「縄文ムラのくらし」などがある。使用目的では、教科書、テスト、問題集など教育関係に加えて、美術資料としての使用も増えてきた。（中山未沙樹）

貸　出　先	出　版　物	貸 出 資 料	備　考
株式会社 ポプラ社	テーマで調べる　クローズアップ！日本の歴史１　縄文人と弥生人	国宝・笹山遺跡火焔型土器	
東京藝術大学出版会	国宝　精選　工芸品・考古資料		
株式会社 西東社	超ビジュアル！　日本の歴史大事典		
光村図書出版 株式会社	美術　1		中学校教科書
実教出版 株式会社	『高校日本史Ｂ　新訂版』		高校教科書
教育出版 株式会社	『小学社会デジタル教科書６年』		小学校教科書
光村図書出版 株式会社	『美術史年表』		
株式会社 NHKエデュケーショナル	NHK Eテレ「びじゅチューン！」		TV番組
朝日新聞出版	日本発掘！　ここまでわかった日本の歴史	国宝・笹山遺跡火焔型土器 野首遺跡土器	
小　学　館	日本美術全集　日本美術創世記（縄文・弥生・古墳時代）		
株式会社 はる制作室	別冊宝島『骨からわかる日本人の起源』	ジオラマ（竪穴住居内）	
株式会社 学研プラス	『パーフェクトコース　中学社会　改訂版』	ジオラマ（秋の一日）	中学校問題集

写真資料の貸出一覧（主要なもの）

５．その他の事業

①資料保存対策事業

市内の藤巻嘉夫氏らが製作し、平成26年10月に寄贈を受けた「藕糸織（ぐうしおり）」（1370×446㎜）は、市内二ツ屋に植えられた「大賀二千年蓮」から紡いだ蓮糸のみで織られている。その糸は大変細く脆弱なもので、摩擦に弱い。平成27年３月、この藕糸織の保存方法について文化財保存修復学会の専門家の方々から指導を受けた。検討の結果、藕糸織を巻かずに広げた状態で保管・展示ができ、湿度や空気環境が安定する密閉型の額装を施すこととした。国立民族学博物館准教授の日髙真吾氏及び合同会社文化創造巧芸の協力により、平成27年11月23日に採寸作業、平成28年3月12日に額装を行った。（村山　歩）

藕糸織（拡大）

採寸作業

額装状況

②雪文化３館提携事業・国宝発信事業

雪文化３館提携事業では、割引券付きスタンプラリーを行い、３館すべての押印が終わった来館者には記念品を贈呈している。また、国宝発信事業では、博物館ホームページの更新作業（一部は業者委託）および博物館案内看板（市内６か所）の管理を行った。（菅沼　亘）

Ⅲ　調査・報告

特別寄稿

美術から見た縄文土器　―火焔型土器の登場―

東京国立博物館　鈴 木 希 帆

縄文土器が日本美術の作品として一般に普及するのは、1952年の芸術家・岡本太郎による縄文土器論（「縄文土器―四次元との対話」『みづゑ』1952年２月号掲載）以降のことである。岡本は「縄文土器を発見したのはぼくなんですよ。戦後ですよ」「私が発言するまで、誰も日本の芸術として取りあげることもしなかった」と語っている(1)。日本美術史家の秋山光和も、岡本の縄文土器に対する熱っぽい賛辞が美術家や美術批評家、美術鑑賞家を巻き込み「それまでの考古学資料を一挙に鑑賞の王座に押しあげた」と語っている(2)。しかし、縄文土器は1930年に刊行された東洋美術研究会編『東洋美術特輯 日本美術史 第一冊』ですでに日本美術史の通史に登場している。加えて、第二次世界大戦後の1948年には国立博物館(現在の東京国立博物館)で開催された「日本美術史総合展」の会場でも日本美術の作品として展示されていた。岡本の発言以前より、縄文土器は日本の芸術として扱われていたのである。しかしながらそれらに注目する人は少なく、秋山が指摘するように、多くの人々にとって縄文土器は考古学資料でしかなかった。岡本の縄文土器論は、これまで縄文土器の造形的な評価に積極的ではなかった人々の眼を一気に引き付ける、何か新規な視点を持っていたのではないだろうか。

日本美術の歴史を振り返ると、1901年（明治34）に政府によって刊行された『稿本日本帝国美術略史』において、推古朝以前のものは語るべきものがないとされ、以降、1930年まで縄文土器が取り上げられることはなかった。しかしながら古くは江戸時代より縄文土器には造形的な関心が寄せられていた。例えば、菅江真澄による古土器の図録『新古祝甕品類之図』（文政４年頃）や、谷文晁らの『耽奇漫録』（文政７年）にも縄文晩期の亀ヶ岡の土器が登場する。さらに東北大学や大英博物館には、江戸時代に内側に金箔が貼られ茶道具として用いられたとされる縄文土器が所蔵されている。明治時代になると帝国大学理科大学の坪井正五郎を中心とした人類学の分野において、アイヌやコロボックルの作った原始工芸品として縄文土器の文様研究が行われた。坪井は人類学教室の画工の大野雲外（延太郎）にアイヌ文様と石器時代文様の両方を採集するように指示し、大野は採集した文様の中から、『模様のくら』（嵩山房、1901年）、『人種紋様先住民の部』（芸艸堂、1916年）などの縄文土器図案集を制作している。殖産興業の時代を背景に、縄文土器の文様は輸出用工芸品や織物に用いる新たなデザインとしても注目された(3)。続く大正時代の農商務省の図案コンペ（『農商務省圖案及応用作品展覧会図録』大正２，３，４年参照）の作品のなかにも、縄文土器の文様に由来するデザインを確認することができる。これらの工芸図案に参考にされた縄文土器は、線

図１　東洋美術研究会編『東洋美術特輯 日本美術史 第一冊』飛鳥園1930年掲載の縄文土器（現在、辰馬考古資料館が所蔵）

刻などの技法による器面に従属した面的な文様を持つ縄文後期や晩期の浅鉢や注口土器であった。そして昭和に入り、先述の1930年の東洋美術研究会編『東洋美術特輯 日本美術史 第一冊』で1頁いっぱいの大きさの写真で縄文時代の代表作として登場したのも、これまでの面的な嗜好を継承する、縄文後期の注口土器であった〔図１〕。本書は考古学者の濱田青陵（耕作）が編集している。

これに対し、1952年の美術雑誌『みづゑ』に掲載された岡本の縄文土器論では、立体的な粘土の貼り付け文様を持つ縄文中期の深鉢、火焔型土器が最初の頁を飾り〔図２〕、その他にも勝坂式などの口縁部に動きのある縄文中期の深鉢の写真が多数掲載されている。ここに、これまでの縄文後期や晩期の浅鉢や注口土器を中心とした原始工芸品とは異なる、岡本の縄文土器に対する新たな美の視点を確認することができる。

四次元との対話

縄文土器論　　岡本太郎

図２　『みずゑ』1952年２月号掲載の岡本太郎「縄文土器論」巻頭頁

『みづゑ』の縄文土器論は、大幅に加筆され1956年に単行本『日本の伝統』に「縄文土器―民族の生命力」として収められた。これにより美術関係者以外にも縄文の美が普及していった。『みずゑ』の時とは異なり、『日本の伝統』には岡本自ら明治大学や東京大学、東京国立博物館や国分寺町文化財保存館に出向いて撮影した縄文土器の写真が用いられている。縄文土器の芸術性に関しても、『みづゑ』での「荒々しい、不協和な形態」という印象批評から、『日本の伝統』では「アシメントリー（左右不均衡）」、「破調であり、ダイナミズム」という造形構造の分析に進んでいる。岡本は文中で、縄文土器を見て「どうしても土器の周囲をまわって見なければすまない衝動」に駆られたと述べているが、これは彼が、当時すでに絵画だけでなく、陶による立体作品を制作していたことと関係しているのかもしれない。そしてこの彫刻家・岡本太郎の眼は、「背景としてだけ考えられていた空間を、内部に取りこみ、造型要素に転化せしめ、ついには空間そのものを彫刻した」「抽象主義彫刻家(4)」の作品に劣らない「超近代的な空間感覚」を縄文中期の土器に見出していく。造形分析が深められていくにつれ、岡本の関心は土器表面の文様よりも、立体的な土器構造に移っていったように思われる。ここで取り上げられた縄文中期の土器の造形的な特徴は、弥生時代の造形的特徴（であると岡本が考える）「幾何学的」「静的」「平面化」「シンメトリーの形式主義」「均衡」と対峙され強調されていく。

当時、縄文に関心を示した芸術家は岡本だけではなかった。瀧口修造や長谷川三郎、吉原治良などは、岡本よりも早い時期から縄文に注目していた。しかし土偶を中心とした彼らの縄文への関心は、作風の拙さや古さへのロマンチシズムを含んだ過去の原始性に向けられたものであった。これに対し岡本の関心は、縄文中期土器の造形構造そのものにあった。縄文土器の造形を介した同時代の文化や芸術の検証も彼の目的の一つであったのかもしれない。この岡本による縄文土器への同時代の視点の導入は、「考古学資料」を原始工芸品からさらに進めて、それ自体で自立する美術作品として「一挙に鑑賞の王座に押しあげ」た。以降、縄文時代の美術作品として取り上げられる土器も、かつての縄文晩期や後期の土器から、岡本が取り上げた縄文中期の土器へと変化する。

このように縄文土器を日本美術の作品として一般に普及させた岡本の縄文観の形成過程に、縄文中期の火焔型土器が存在していたことは間違いないであろう。岡本が縄文の美を発見したのは1951年に国立博物館で開催された考古学の展示「日本古代文化展」である。この展示を担当した考古学者の八幡一郎は、農耕を獲得した弥生時代と狩猟採集の縄文時代の文化的差異を示すことを展示意図とし、パンフレットでは縄文時代の火焔型土器と弥生時代の壺型土器の写真を対比的に用いた〔図３〕。岡本が縄文の美の発見の興奮を初めて語っている雑誌『草月』の対談ページにも、「日本古代文化展」のパンフレットと同じ火焔型土器の写真が用いられている(5)。そして『みづゑ』の「縄文土器論」の巻頭頁を飾ったのも火焔型土器であった〔図２〕。火焔型土器は、岡本が縄文中期土器に見出した自立した美術作品としての造形構造の本質を体現しているだけでなく、現代の日本美術を考える上で重要な「工芸」、「かざり」、「前衛」などの多様なキーワードをも内包している。東京国立博物館での今日の展示状況を見ても、火焔型土器は日本考古学の展示室ではなく「日本美術の流れ」という美術の展示室に展示されている。世界各国の人々を魅了する火焔型土器は、これからも日本美術史上に代表作として君臨し続けていくことであろう。

図３　国立博物館で1951年に開催された「日本古代文化展」のパンフレット 国立博物館『日本古代文化展 見方と解説』1951年より

注

(1)『岡本太郎著作集　第九巻　太郎対談』講談社、1980年

(2) 秋山光和「日本人の日本美術への感覚」『芸術新潮』1962年２月

(3) 拙論「近代日本における縄文土器観 ―大野雲外の図案化を中心に―」『美術史』第171号、2011年

(4) ムアー（ヘンリー・ムーア）、ガボ（ナウム・ガボ）、ペヴスネール（アントワーヌ・ペヴスナー）、リプシッツ（ジャック・リプシッツ）、ゴンザレス（フリオ・ゴンザレス）、ジャコメッティ（アルベルト・ジャコメッティ）、カルダー（アレクサンダー・カルダー）が挙げられている。本文の図版には、ペヴスナーの《勝利の展開縦隊》（1946年）とガボの《空間の線的構成》（1949年）が登場する。

(5)「いけばなあれこれ放談会」『草月』３号、1952年１月。岡本の他、座談会には水沢澄夫（美術史家）、藤川栄子（画家）、勅使河原蒼風（華道家）、土門拳（写真家）、阿部公房（作家）が出席している。

報　告

博物館所蔵写真資料の各種印刷物における利用状況

菅　沼　　亘（学芸員）

当館では毎年、100件を超える館蔵写真資料の使用許可申請事務を行っている。写真資料の使用形態は、雑誌・書籍類が最も多く、他に新聞、各種チラシ、ホームページ、テレビ番組、商品パッケージなど多岐におよぶ。許可の可否について明確な判断基準は設けていないが、明らかに公序良俗に反するもの以外は許可しているのが現状である。また、博物館の広告に資するという観点から、原則として使用料は無料としている。その代わりとして雑誌・書籍類については、献本という形で寄贈を受け、館の図書資料として保管している。

今年度より、館蔵写真資料が各種印刷物においてどのように使用されているか、その実態を把握するため、臨時職員の協力を得て献本された図書資料のデータベース作成を行った。今回は、その概要を報告する。データの入力にあたっては、一般に公開されている・いないに関わらず、館に保管され冊子状に製本されている印刷物は極力入力の対象とした。ただし、他館への実物資料貸出に伴う特別展および企画展図録は含まない。

入力項目は、①書名、②巻・号、③著者(編集者・監修者)、④発行所(者)、⑤発行日、⑥掲載誌のジャンル、⑦掲載資料名、⑧資料が掲載されている頁の章・見出し、⑨掲載資料のテーマ別分類、⑩備考の計10項目である。⑥については、大手インターネット通販サイトの本のブラウズに従った。公官庁刊行物や各種の集会・研究会資料、パンフレット類などこれにあてはまらないものはその他としている。⑧については、写真資料が本文中のどのような脈略の中で使用されているか把握するためのものである。⑨は館の展示テーマのいずれにあたるのかを見るもので、「雪」、「織物」、「信濃川」、「縄文」、「その他」の５項目を設定した。

平成28年２月29日現在で、計632点の印刷物を確認することができた。この内、発行年が明らかなもの603点の発行年別推移を図1に示した。昭和61年以来、右肩上がりに増えている。平成11年に３倍近く増加しているのは、後述する当館所蔵の笹山遺跡出土品が国宝指定されたことによるものである。掲載写真の展示テーマ別の傾向を見ると、雪18（2.6%）、織物44（6.4%）、信濃川２（0.3%）、縄文571（83.1%）、その他52点（7.6%）であり、縄文が80％以上を占めている。縄文をテーマとした571点の内、481点（84%）は国宝・笹山遺跡火焔型土器関係写真、その他は当館考古展示室の竪穴住居ジオラマ（秋・冬・住居内の風景）写真などである。

また、縄文関連の写真が掲載されている印刷物のジャンルを見ると、考古学30点(5.2%)、日本史・歴史一般69点（12.1%）、美術・芸術65点（11.4%）、子供向け学習図書37点（6.5%）、教科書・テスト類215点（37.6%）、旅行・趣味41点（7.2%）、その他114点（20%）であり、教科書・テスト類が３分の１を占めている。この教科書・テスト類を学校別にみると、小学校110、中学校87、高校17、大学１点であり、この内の６割以上をワークシート、塾内・通信教育教材などのテスト類が占めている。これ以外の教科書について見ると、小学校では社会科で採用されている例がほとんどすべてであるのに対し、中学校になると、歴史の他に美術において採用される割合が増えている。高校では、日本史、世界史、美術の他、現代文や理科総合などにおいても採用されている（表１）。

冒頭で述べたとおり、館蔵実物資料の貸出件数が毎年10件前後であるのに対し、写真資料の貸出件数はその10倍以上にのぼる。館蔵写真資料が印刷物に掲載されるなど、様々な形での使用が館の広告機能の一翼を担い、その活動・運営に貢献していると考えられる。また、博物館の実績を判断する基準として、入館者数という目に見える指標の他に、今回報告した写真資料の利用という目に見えない指標もあることがわかった。今後も引き続き、データの詳細な分析を行いたい。

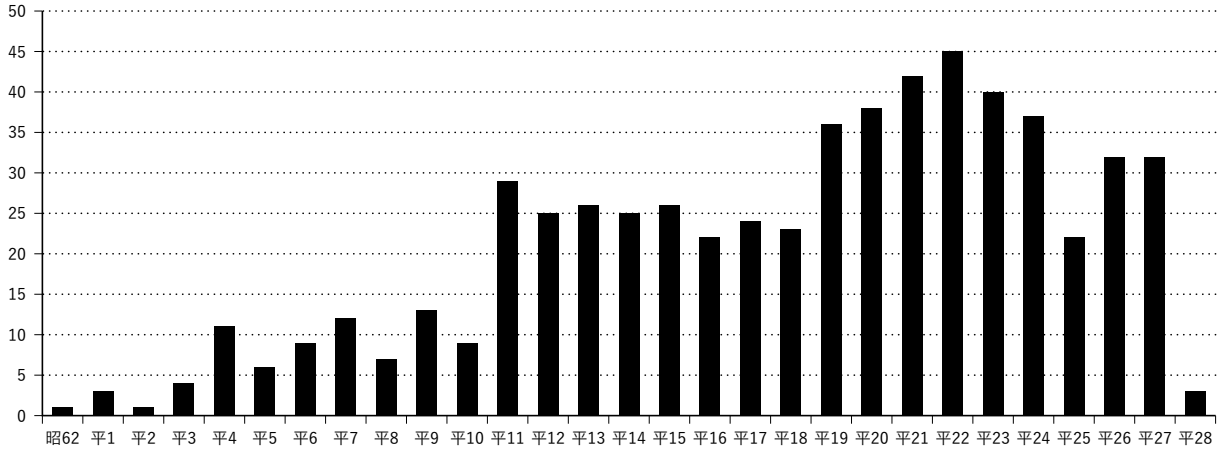


図１　博物館所蔵写真資料掲載印刷物の受入冊数の推移

学校	書　　名	発行所	検定・受入年	掲載写真資料
小学校	よみがえる越佐の原始・古代・中世	新潟県教育委員会	平成２受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	小学　日本歴史早わかり	受験研究社	平成11受入	ジオラマ(竪穴住居内)
	社会科資料集　６年	(株)教育同人社	平成12受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	小学　社会　６上	(株)教育出版	平成13・16検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	わたしたちの十日町市	十日町市教育委員会	平成15・18・23	国宝・火焔型土器(No.1)
	社会　６	(株)光村図書出版	平成22・26検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	社会科資料集　６年	(株)正進社	平成27受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	日本のあゆみ　小学生の社会　６上	(株)日本文教出版	平成９受入	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(竪穴住居内)
	図画工作　５・６上　見つめて　広げて	(株)日本文教出版	平成26検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	社会科資料集　６年	(株)光文書院	平成15・18・22・27受入	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(冬)
	社会科資料集　６年	(株)新学社	平成11・14・17・23・27受入	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(竪穴住居内)
	社会科資料集　６年	(株)文渓堂	平成７～11・14～17・21・23・27受入	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(秋・冬・竪穴住居内)
	小学　歴史　この一冊　歴史的景観を育てる資料と展開	(株)文渓堂	平成18受入	国宝・火焔型土器(No.1)
中学校	中学社会　歴史的分野	(株)大阪書籍	平成13検定	ジオラマ(竪穴住居内)
	中学社会　新編　新しい歴史教科書	(株)自由社	平成21検定	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(竪穴住居内)
	中学社会　新しい歴史教科書	(株)自由社	平成23検定	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(竪穴住居内)
	新　中学総合歴史	(株)正進社	平成13受入	国宝・火焔型土器(No.8)
	カラー版　歴史の資料	(株)正進社	平成14・20受入	ジオラマ(秋・冬・竪穴住居内)、越後アンギン編み具
	中学スタンダード　歴史資料	(株)帝国書院	平成20受入	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(竪穴住居内)
	社会科　中学生の歴史　日本の歩みと世界の動き	(株)帝国書院	平成23検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	アドバンス　中学歴史資料	(株)帝国書院	平成24受入	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(竪穴住居内)
	ビジュアル歴史　新潟県版	(株)東京法令出版	平成18受入	国宝・火焔型・王冠型土器群
	わたしたちの中学社会　歴史的分野	(株)日本書籍	平成13検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	中学の社会科　歴史　日本の歩みと世界	(株)日本文教出版	平成17検定	ジオラマ(竪穴住居内)
	中学社会　歴史的分野	(株)日本文教出版	平成27受入	国宝・火焔型土器(No.1)、ジオラマ(竪穴住居内)
	資料から考える　総合歴史	(株)浜島書店	平成９受入	国宝・磨製石斧
	資料カラー歴史	(株)浜島書店	平成９受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	新訂　資料カラー歴史	(株)浜島書店	平成19受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	中学歴史資料集　学び考える歴史	(株)浜島書店	平成23受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	最新歴史資料集	(株)明治図書出版	平成12受入	ジオラマ(秋・竪穴住居内)
	美術資料　１～３年用	(株)秀学社	平成10・13受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	美術資料	(株)秀学社	平成19・24・27受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	美術　１	(株)光村図書出版	平成27検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	美術　２・３上　美術の広がり	(株)光村図書出版	平成23検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	美術　２・３上　美を求めて	(株)日本文教出版	平成17検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	新　美術　表現と鑑賞	(株)開隆堂出版	平成22受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	新教科書完全対応　個性発揮のアイデアいっぱい！ 中学美術　ザ・ヒット題材	(株)明治図書出版	平成28受入	国宝・火焔型土器(No.1)
高校	プロムナード日本史	(株)浜島書店	平成11受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	新詳日本史	(株)浜島書店	平成25受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	図説　日本史通覧	(株)帝国書院	平成26受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	高校日本史　B	(株)山川出版社	平成26受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	写真資料館　日本史のアーカイブ	(株)東京法令出版	平成17受入	国宝・火焔型・王冠型土器群
	新世紀図説　世界史のパサージュ	(株)東京法令出版	平成16受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	美術　１	(株)光村図書出版	平成14・18・24検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	高等学校美術Ⅰ　教授資料	(株)光村図書出版	平成19受入	国宝・火焔型土器(No.1)
	現代文　２	(株)東京書籍	平成17・20検定	国宝・火焔型土器(No.1)
	理科総合A	(株)実教出版	平成15受入	国宝・火焔型土器(No.1)

表１　博物館所蔵縄文関連写真資料掲載教科書一覧

Ⅳ　博物館友の会

博物館友の会は、博物館開館に先立って昭和54年に発足し、会員は741名（平成27年９月現在）である。現在、植物・古文書・いしぶみ・歴史・方言・考古・近代史（世界遺産を学ぶ会）・着物の８つの研究グループが、独自の研究活動を行っている（民俗グループは活動休止中）。今年度の友の会の主な活動は以下のとおりである。

４月11日（土）　平成27年度総会（会場：博物館特別展示室）
　　記念講演会「神社と祭事に纏わるはなし」
　　講師：永田忠興氏（彌彦神社宮司）
５月16日（土）　火焔122号発行
６月12日（金）・16日（火）　第80回文化財めぐり
　　「姨捨伝説の里で棚田の絶景と史跡を訪ねて
　　～信州さらしなの里（千曲市）と松代城跡～」
　　参加費：7,000円　　参加者：43名
７月４日（土）　庚申供養祭（会場：郷土植物園）
９月５日（土）　火焔123号発行
10月４日（日）　第６回市民活動見本市「めっかめっか」（会場：千手コミュニティセンター）
　　展示出品
10月７日（水）・15日（木）　第81回文化財めぐり
　　「漢学者諸橋轍次記念館と三条の史跡を訪ねて
　　～鬼踊りの本成寺・真宗大谷派三条東別院・
　　歴史民俗産業資料館など～」
　　参加費：7,000円　　参加者：40名
10月17日（日）　新潟県博物館友の会ミーティング（会場：大河津分水資料館）
　　７団体20名参加
２月６日（土）　火焔124号発行
２月20日（土）・21日（日）　第67回十日町雪まつり　はくぶつかんひろば開設
　　（伊乎乃庵、売店、縄文クッキー・甘酒のサービス、すべり台、雪像、西小学校・飛渡第一小学校児童の物品販売など）
　　ひろば来場者　20日：1,050名　　21日：480名
３月12日（土）　研究グループ発表会（会場：博物館特別展示室）　参加者：50名　　（村山　歩）

第80回 文化財めぐり

第67回 十日町雪まつり

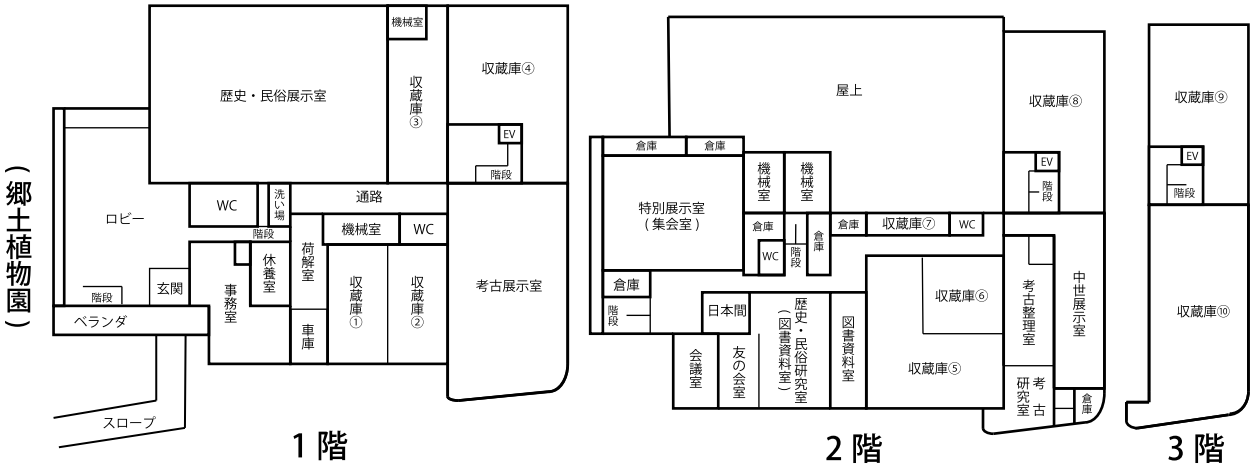
研究グループ発表会

附編　入館者数の推移

年　度	大　人		小　人		合　計 ( )内団体数	備　考
	個 人	団 体（数）	個 人	団 体（数）		
昭和54(1979)						博物館開館・友の会設立 入館料無料
昭和55(1980)						入館料無料
昭和56(1981)	7,401	8,215 (235)	3,387	1,997 (43)	21,000 (278)	入館料100円
昭和57(1982)	10,309	6,108 (226)	3,875	2,841 (56)	23,133 (282)	
昭和58(1983)	10,291	5,651 (205)	2,854	2,478 (52)	21,274 (257)	
昭和59(1984)	11,396	7,574 (205)	2,383	2,273 (34)	23,626 (239)	開館・友の会設立５周年
昭和60(1985)	7,226	5,559 (179)	3,120	1,370 (29)	17,275 (208)	越後縮資料重文指定
昭和61(1986)	8,787	5,700 (205)	6,755	3,551 (57)	24,793 (262)	郷土植物園開園
昭和62(1987)	7,434	6,637 (219)	3,904	2,030 (40)	20,005 (259)	
昭和63(1988)	10,274	4,718 (152)	3,207	1,869 (35)	20,068 (187)	遺跡ひろば開場 博物館増築工事
平成元(1989)	11,442	3,850 (123)	3,538	1,972 (41)	20,802 (164)	開館・友の会設立10周年
平成２(1990)	10,166	3,075 (126)	2,191	1,116 (22)	16,548 (148)	
平成３(1991)	9,899	5,837 (189)	3,297	1,819 (38)	20,852 (227)	積雪期用具重文指定 新館考古展示室オープン
平成４(1992)	10,460	4,908 (126)	3,099	2,138 (46)	20,605 (172)	笹山遺跡出土品重文指定 入館料200円
平成５(1993)	10,074	4,958 (134)	3,268	1,943 (45)	20,243 (179)	
平成６(1994)	9,678	2,889 (94)	2,956	1,623 (41)	17,146 (135)	開館・友の会設立15周年 旧館・常設展示室リニューアルオープン
平成７(1995)	11,979	3,819 (115)	2,365	1,879 (53)	20,042 (168)	
平成８(1996)	11,255	4,592 (124)	2,011	1,598 (40)	19,456 (164)	
平成９(1997)	12,890	4,467 (130)	1,641	2,258 (62)	21,256 (192)	
平成10(1998)	13,718	2,985 (85)	1,803	1,350 (33)	19,856 (118)	
平成11(1999)	21,337	5,540 (159)	2,811	3,394 (65)	33,082 (224)	開館・友の会設立20周年 笹山遺跡出土品国宝指定
平成12(2000)	15,252	5,150 (134)	1,886	2,072 (49)	24,360 (183)	入館料500円、第１回大地の芸術祭
平成13(2001)	12,162	3,365 (91)	1,561	1,903 (42)	18,991 (133)	
平成14(2002)	11,368	2,230 (60)	1,720	1,429 (32)	16,747 (92)	
平成15(2003)	11,313	2,981 (81)	1,624	1,495 (27)	17,413 (108)	第2回大地の芸術祭
平成16(2004)	8,568	2,715 (77)	1,470	1,075 (31)	13,828 (108)	開館・友の会設立25周年 中越大震災（10/23）
平成17(2005)	10,829	1,458 (46)	1,398	2,431 (54)	16,116 (100)	入館料200円（団体150円） 12月から豪雪
平成18(2006)	14,322	2,771 (76)	1,776	2,627 (69)	21,496 (145)	入館料300円（団体250円） 第３回大地の芸術祭
平成19(2007)	11,663	2,384 (78)	1,356	3,294 (83)	18,697 (161)	中越沖地震（7/16）
平成20(2008)	10,617	2,261 (67)	1,519	2,668 (55)	17,065 (122)	
平成21(2009)	12,766	1,969 (47)	1,840	2,141 (49)	18,716 (96)	開館・友の会設立30周年 第４回大地の芸術祭
平成22(2010)	10,778	1,431 (43)	1,964	1,661 (41)	15,834 (84)	東日本大震災（3/11） 長野県北部地震（3/12）
平成23(2011)	9,511	1,169 (33)	1,542	1,508 (45)	13,730 (78)	
平成24(2012)	15,493	1,138 (38)	2,001	1,630 (39)	20,262 (77)	第５回大地の芸術祭
平成25(2013)	11,241	806 (26)	1,250	1,461 (34)	14,758 (60)	
平成26(2014)	12,518	768 (30)	1,063	1,510 (38)	15,859 (68)	開館・友の会設立35周年 友の会員入館無料化
平成27(2015)	15,552	1,114 (36)	1,636	1,344 (27)	19,646 (63)	第６回大地の芸術祭
総　計	399,969	130,792 (3,994)	84,071	69,748 (1,547)	684,580 (5,541)	

（大人は高校生以上・小人は中学生以下、団体は20人以上・小人の団体は学校単位）

施設概要



（遺跡ひろば）

＜建物の床面積＞

1 階	1,855 ㎡
2 階	1,439 ㎡
3 階	458 ㎡
その他	56 ㎡
合計	3,808 ㎡

＜屋内施設＞

歴史・民俗展示室	476 ㎡	収蔵庫①	79 ㎡	収蔵庫⑥	69 ㎡	事務室・休養室	123 ㎡
考古展示室	278 ㎡	収蔵庫②	79 ㎡	収蔵庫⑦	23 ㎡	歴史・民俗研究室・資料室	143 ㎡
中世展示室	115 ㎡	収蔵庫③	104 ㎡	収蔵庫⑧	164 ㎡	考古研究室・整理室	115 ㎡
特別展示室（集会室）	181 ㎡	収蔵庫④	191 ㎡	収蔵庫⑨	164 ㎡	会議室・日本間・友の会室	94 ㎡
展示室　計	1,050 ㎡	収蔵庫⑤	160 ㎡	収蔵庫⑩	247 ㎡	その他	1,003 ㎡
				収蔵庫　計	1,280 ㎡	共用部　計	1,478 ㎡

＜屋外施設＞

郷土植物園　3,010 ㎡　　遺跡ひろば　3,008 ㎡

博物館の外観

遺跡ひろば（昭和 63 年開園）

郷土植物園（昭和 61 年開園）

〈平成27年度　博物館職員〉

館　長	佐 野 誠 市	嘱 託 職 員	佐 野 芳 隆(10/1～)
副館長	石 原 正 敏(学芸員)	〃	宮 内 信 雄(調査研究員)
主　査	矢口 ヨネ子	事務支援員	中山 未沙樹
〃	菅 沼　亘(学芸員)	臨 時 職 員	角 山 誠 一
〃	村 山　歩	〃	阿 部 智 美(7/1～)
〃	笠 井 洋 祐(学芸員)	〃	阿部 美記子(～6/30)
〃	南 雲 勝 巳	〃	瀧沢 亜矢羽
〃	大 滝 孝 子	〃	近　春 奈(7/1～9/26)
〃	阿 部　敬(学芸員)	〃	田 村　薫
主　事	田 村 典 子	〃	引 間 佳 子

十日町市博物館 年報 第２号

編集・発行：十日町市博物館

〒948-0072 新潟県十日町市西本町１　TEL:025-757-5531 ／ FAX:025-757-6998

URL: http://www.tokamachi-museum.jp ／ E-mail: museum.10@city.tokamachi.lg.jp

発行日：平成28年(2016) 3 月31日　　印　刷：株式会社 滝沢印刷